

自著と  
その周辺

## 漏斗胸の治療

克誠堂出版

189頁

2016年2月25日発行

定価16,000円+税

著者：永竿 智久・野口 昌彦

残念なことに今では学生時代の授業内容のほとんどを忘れてしまっているのですが、そんな中で今でも鮮明に覚えている治療術式があります。それが漏斗胸治療における胸骨翻転術です。漏斗胸が前胸部の陥凹変形を特徴とする疾患であることは今更述べるまでもありませんが、この治療法として説明された胸骨翻転術は凹んだ胸郭を取り出し180度回転させ戻す！正に“コロンブスの卵”と言った発想に驚かされた記憶は今でも新鮮です。私は現在、先天性外表奇形の中でもこの漏斗胸を代表とする胸郭変形の治療を専門としていますが、この思い出が影響したのでしょうか。

さてこの寄稿を依頼された時、改めて漏斗胸という疾患の特徴を考えてみました。漏斗胸は数ある先天奇形の中でもその頻度は400人に1人と発生率が高い疾患です。恐らく多くの方が漏斗胸患者に実際に接し何らかの診療を行った経験があるのではないかと思います。大変馴染み深い疾患なのですが、一方で陥凹変形に対する治療に関し実際に患者さんから質問された場合、返答に困るのも事実ではないでしょうか。「形態面の問題なので…」と済ませてしまったことも多いかと思います。実は漏斗胸は未だその成因が解明されておらず、また治療の指標となる客観的診断法もなく、まだまだ未知の疾患なのです。そのため治療においては極めて初診医によるバイアスが生じやすい。この点が漏斗胸の最大の特徴と考えます。漏斗胸は単なる形態面での問題では治まらない！漏斗胸疾患の持つ病態の多様性が少しでも伝わればとの想いがあります。

私が漏斗胸治療に専念したのは1990年の始めですが、その時代において治療の主流であったのはラビッチ法に代表される胸骨挙上術でした。同方法でも確かに陥凹変形を治すことは出来たのですが、広範囲におよぶ剥離や肋軟骨切除の侵襲が大きく、これらが成長に及ぼす影響は無視出来ないものがありました。そのため当初の私のテーマは如何にこれらの侵襲を最小限に抑えるかでした。5年の歳月を経て何とか一つの形にまとめ上げた手技を報告した1999年、福岡での日本形成外科学会総会で初めてNuss法の存在を知ることになったのです。すでに250例を超える漏斗胸治療を経験していたことから、僅か一本の金属バーで治療するというNuss法での結果を俄には信じることが出来ない気持ちで一杯でした。同日講演が終了するやいなや、Nuss先生のもとに掛けより見学を申し入れました。結局私の疑問が解消されるまでに要したのは渡米までの僅か数カ月でした。

さてNuss法との出会いでの最大の発見が漏斗胸術後に肺活量や心拍出量などの機能が改善するということでした。“形態は機能である”と言う表現は形成外科の十八番ですが、これを正に地で行く治療、それがNuss法でした。さらに近年の研究では、運動時の弁輪を含めた心臓の拡張不全が漏斗胸における呼吸苦などの一因との報告も増えており、これらは漏斗胸治療の更なる動機づけとして私の気持ちを後押ししてくれております。このような漏斗胸治療における新知見は以前の術式による治療結果からでは辿りつけなかった発見であり、Nuss法という革新的な治療法がもたらした新たな治療適応の拡大と考えます。

このように考えた時、如何にNuss法を正確で安全な治療として伝えるのかは大変重要と考えました。Nuss法が本邦に紹介された当時は剥離を始め実際の手技は文字通り手探りで進めるしかなく、随分と怖い思いもしました。心臓こそ傷つかなかったものの、心膜損傷から始まり血胸、心タンポナーデによる緊急ドレナージ。またバーによる異物反応からMRSA感染に発展し、引いては抜去までの3年間毎週通院治療で乗り切ったお子さんなどおよそNuss法で報告されている合併症のほとんどを経験しました。これらのトラウマからかNuss法が一般的となり15年近くとなる現在でもNuss法を行う際には緊張します。近年“危機的出血への対応ガイドライン”が麻酔科学会を中心にまとめられています。院内では蚊帳の外と考えられている形成外科医の自分が意外にも最も危機的対応を迫られる対象者ではと肝を冷やすことも然りです。そんな思いもあって漏斗胸治療に携わる多くの医療者が、そしてこれから漏斗胸治療に取り組もうと考える若手医師がこのような不安を抱えることがないようにと、世界初となる漏斗胸に限定した教科書として本書を執筆する運びとなりました。

漏斗胸は数ある疾患の中でもその治療を専門として標榜する科が多い疾患です。特に本邦ではこの傾向が強く、形成外科、小児外科を始めに、胸部外科、呼吸器外科など、様々な科で治療がなされています。年に一度これらの科が集まる研究会では毎回時間を忘れた討論が続き、討論の場所を地方の居酒屋に移して深夜まで語り合うのが通例です。漏斗胸治療の何がこんなにも皆を熱くするのでしょうか？今回紹介させていただく本書は正にこんな想いをともにするこれらの学会を通じて出来上がったものです。写真やイラストを中心とした構成は外科医のみならず漏斗胸患者の初診医として最も診察の機会が多いと考える小児科医の方々にとっても漏斗胸治療の概要を把握しやすく親しみやすい形となっております。是非、この一冊に馴染み深い漏斗胸治療の新たな側面を感じていただけたらと思います。

(長野県立こども病院形成外科 野口昌彦)